

報告

鞠智城跡の調査成果概要と取組み

報告者紹介

西住 欣一郎（にしづみ きんいちろう）

熊本大学大学院文学研究科修士課程修了。熊本県文化課で埋蔵文化財担当、
城跡調査主査、課長補佐を経て、現在、熊本県立裝飾古墳館分館「歴史公園鞠智
城・温故創生館」館長。鞠智城の調査成果を活かした活用に主として従事。

報告 「鞠智城跡の調査成果概要と取組み」

歴史公園鞠智城・温故創生館長 西住欣一郎

皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました鞠智城の西住といいます。本日はこのようにたくさんの皆さんの中をご報告をするということで緊張していますが、逆にやりがいを感じているところです。頑張っていただきたいと思いますのでよろしくお願ひします。

一・鞠智城跡の位置と環境

古代山城の分布をみると、鞠智城は古代山城の中で一番南に位置しているわけです。九州の大宰府を護る大野城、基肄城、そのさらに南、一番南に位置しています（資料編48頁上図）。このお城が造られた経緯となるのが、六六三年、白村江（はくすきのえ、はくそんこう）の戦いに、日本は負けてしまいます。それでどうとう唐、新羅の連合軍が日本に攻めてくるのではないかということで、防衛ラインを築いていくわけです。その防衛ラインは、まず九州では大宰府を護ろうと、最前線基地として対馬に金田城を造りました。それからこのようない北九州、瀬戸内、そして畿内へのルートを考えたと思うのですが、瀬戸内海沿いに古代の山城を築いていくという環境の中で、鞠智城が造られていることになります。ここで注目したいのは、

一番南にお城があるということです。これが鞠智城のポイントではないかと思います。

次に、山鹿市、菊池市にまたがつて、鞠智城は造られているわけですが、有明海に流れ込む菊池川があります。そして、この菊池川の河口から約二七キロの場所にあります。菊池川でいいますと、菊池川の中流域といつていいのではないかと考えることができます。非常においしいお米が取れる流域です。菊池米というように、大阪の米相場を左右するぐらい、いいお米が取れる、そのような生産基盤を持った場所に鞠智城は位置しています。

次に、鞠智城は、土塁は崖と合わせて約三・五キロの長さになります（資料編2頁第1図）。面積は約五五ヘクタール程です。もう一つの特徴になると思いますが、古代山城といつわりには非常に低い場所に立地しています。標高が九〇メートルから一七一メートルで、山というよりも台地といったほうがいいのではないかと思います。平らな低い場所にお城があるというのが、二番目の特徴ではないかと思います。

そして長者原地区に様々な建物群がありまして、北に谷が入っています

（資料編3頁写真1）。また南側の三カ所に門が確認されています。北側の谷の部分には、後でご説明しようと思いますが、古代山城では日本で初めての貯水池が確認されています。鞠智城はこのような構造をしています。



二・文献に見る鞠智城跡

鞠智城については、遺構だけではなく、歴史書の中に文字資料として残っています（資料編3頁資料1）。『続日本紀』『日本文德天皇実錄』等に鞠智城のことが出ています。ここで注目しなければいけないのが『続日本紀』ですが、西暦六九八年に改築をしたとあります。できているものを一度修理したという記事が出ているわけです。六九八年より以前に築造をされているということが記録から分かります。

三・調査成果の概要

熊本県教育委員会は昭和四二年に第一次調査を開始して、それから平成一二年度まで三三回に及ぶ調査をほぼ継続的に行つてきました。その成果をまとめた鞠智城の総合報告書（熊本県文化財調査報告第二七六集『鞠智城跡II・鞠智城跡第八～三二次調査報告』（一〇二二）を、文化庁のご指導を受けながら作りました。その中に書かれていることを今から概要としてお話しします。

鞠智城は年代とともに大きく変化をしていきます。その変化の特徴を捉えていくと、最初の造られたところから五つに分けることができました（資料編6頁第3図）。その最初をI期と呼んでいますが、建物の配置で示したように、網掛けしている場所に建物が建っていたのではないかと考えているところです。I期ですので、出土しているいろいろな遺物などで、考古学のほうは年代を決めていくのですが、七世紀後半ぐらいにはあつたのではないかということが分かるわけです。先ほどの『続日本紀』の記述とあまり矛盾しない

ような内容になっています。

そのI期を創建期と呼んでいますが、まず外郭線上に門を築き、土塁を築造しています。これがその中の一つの門の堀切門を発掘したときの状況（写真1）で、これは西側の土塁を半分に割つて、その断面を見ている写真（写真2）です。先ほど言いましたが、日本の古代山城では初めて発見された貯水池ですが、湧き水ですので当時の生活の飲料水として使うこともできますが、もう一つの特徴として、建物を建築する木材を水漬けにして保管する貯木場（写真3）も見つかっています。このI期というのは、古代山城として必要最小限度の機能を備えた段階ではないかと現在では考えています。

本日のお話をのポイントになつてくると思いますが、第II期というのが、先ほど言いました改築の記事、六九八年の時期と重なるわけです。ここで注目していただきたいのは、直角に交わつてL字に似ている特徴



写真1 堀切門・門跡と道路跡



写真2 西側土塁線・土塁跡



写真3 貯水池跡・貯木場跡

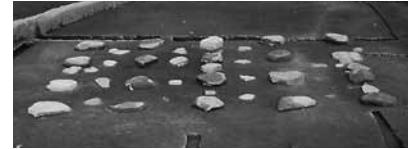


写真4 65号建物跡



写真5 20号建物跡



写真6 56号建物跡

的な建物群があるということ、建物群を囲むための溝が見つかっているということです（資料編5頁第2図）。現在、鞠智城の中で建物が七二棟見つかっていますが、その中で直角に、L字に配する建物群を取り囲むような構造をするのは、ここだけに見つかっています。これは後ほど本日講演をされます先生方のお話に関連しますので、ここで誇張して報告したところです。第Ⅱ期のもう一つの特徴ですが、出土する土器の量がこの時期は非常に多いということです。

次のⅢ期は転換期と呼んでいます。八世紀の第1四半期の後半から第3四半期にかけてです。ここで建物の構造で、地面にそのまま穴を掘つて柱を建てる建物を掘立柱と呼んでいますが、これに対して、基礎となる石を地面に据えて、その基礎の上に柱を建てるという基礎の建物が出現します。それが第Ⅲ期になります。このように基礎石が重複して建つていますが、最初の建物は比較的小さいものになります（写真4）。これがⅢ期の一つの特徴です。

Ⅳ期になりますと、先ほどの基礎石の建物が今度は大きな石に変わつていきます（写真5）。先ほど言いま

した池やL字形に囲んでいる建物は中枢的なものと考えていますが、そこがなくなります。倉庫が中心となるような機能に、ここで変化をするのではないかということで変革期と呼んでいます。

Ⅴ期は最後になります。柱が建つていた場所に人が建ちますと、その大きさが大体わかるかと思いますが、非常に大きな基礎石の建物になります（写真6）。最後の段階になつても建物を造り続けており、約三〇〇年間の最後の姿です。基礎石建ちの建物を何と言つたらいいのでしょうか。ふつう建物といえば側柱だけですが、床を支える総柱の建物になつていますので、食糧を貯える倉庫ではなかつたかと考えているところです。

四・総合報告書を基にした研究の深化

今まででは発掘調査の成果の話をしてきたわけですが、私どもとしては、その成果を活かした様々な研究や活用を行つていくわけですが、今からそのようなことを若干ご紹介したいと思います。

まず総合報告書が出たということで、研究する基礎的な事実がある程度まとまつたので、「論考編」を刊行するなど、研究を進化させていくという活動も一部では行つています。また出土した土器や瓦の生産地を推定するための基礎的な研究書をまとめたということも行つてきました。

五・調査成果を活かした取組み

私どもとしては平成二一年度から、鞠智城の価値を皆さんに知つていただき目的で、ほぼ継続的に各地で

シンポジウムをやっています。それぞれ違うテーマで事実に迫ろうという試みをしてきており、本日ここでいうことで設定をしています。

また「特別研究」ということで若手研究者、四五歳以下の方に研究をしていただくための助成金を県のほうで準備しています。平成二七年度は増額になりまして、一人五〇万円ほどの助成金を出して研究を進めているところです。熊本市のほうで、その結果の成果報告会ということを毎年やっていますが、非常に多くの方々に来ていただき、盛況なうちに実施しているところです。その成果をまとめたものを『鞠智城と古代社会』という論文集を一号から三号までまとめることができています。

今まででは研究者向けの話ですが、皆さんに古代の東アジアの中で非常に激動する時期のロマンを持つていて、ただくということで、一般向けの紹介本も作っています。一号から六号まで、それぞれ特色ある内容で分かりやすい解説書になっています。さらに大人だけでなく子供にも分かつてもらわなければ意味がないので、さらに言葉を優しくして分かりやすい紹介本も作っています。また、もう少し歴史が分かる愛好家の方に知つていただこうということで、『歴史読本』という雑誌がありますが、そこで、本日パネルディスカッションのコーディネーターをしていただく佐藤先生と蒲島知事、五百旗頭先生の三人で鼎談が行われました。

平成二七年度もさまざまな取組みをしていますが、どちらかというと、教育の現場で、鞠智城をどのようにしていこうかということを考えてやっています。その一つが、鞠智城の北にある城北（しろきた）という

地元の小学校で鞠智城の講演会をしています。また、後ほどお話を出ますが、志波城という東北の古代城柵で、「しわまるくん」と「ころうくん」のゆるキャラ同士の交流の中で触れ合いながら広めていこうということで、幼稚園の子供たちと非常に緩やかな、和やかな時間を過ごすことができました。

もう一つ、熊本県では、道徳教育が教科になる前の段階、平成二四年の段階に、「熊本の心」という郷土資料を使つた副読本を作っていますが、小学校五・六年生の中に、鞠智城もテーマとして取り上げられています。これは健太くんという登場人物のおじいさんが宝物にしている鞠智城のお米を通して、ふるさと大切にしようとする心を育てる題材の教材になっています。非常に温かい気持ちが伝わってくる内容ですが、これを使いまして、地元山鹿市の六郷小学校の五年生の道徳の授業で、郷土の文化を大切にする子供たちをたくさん育てたいという内容ですが、私もゲストティーチャーとして、鞠智城のことを、地元ですからきちんと守つていつてくださいという想いを子供たちに伝えました。また、小学校の教育出版の教科書にも鞠智城が出てきます。平成二七年度の社会科の中に出ますが、単元としては日本の歴史、大陸に学んだ国づくりというということで、発展的な学習を行う中で、鞠智城というものが出てきているわけです。

最後になりますが、「ころうくん」がイメージキャラクターとして頑張っていますので、鞠智城とともに「ころうくん」も一緒に大きくなればということで、最後に「ころうくん」を登場させました。ありがとうございました。